

Ⅱ ハッ場ダム予定地の遺跡問題の資料

1 ハッ場ダム事業における埋蔵文化財発掘調査事業の経緯

発掘調査に至る経緯

1986 年 ダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定

1987 年～ 長野原町教育委員会、文化庁の補助事業として 1987 年から 3 カ年計画で県教育委員会文化財保護課の指導の下、埋蔵文化財の詳細分布調査を実施。

1990 年 「長野原町の遺跡―町内遺跡詳細分布調査報告書」(長野原町教育委員会)により、ハッ場ダム予定地では埋蔵文化財包蔵地 79 (川原畑地区 13、川原湯地区 5、横壁地区 15、林地区 22、長野原地区 24)を確認。

その後、遺跡数増大。東宮、尾坂、久々戸など大規模な発掘調査が実施されることになった遺跡も、新発見の遺跡として発掘調査対象に加わった。

発掘調査の開始

1994 年 3 月 18 日 建設省関東地方整備局長と群馬県教育委員会委員長との間で「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結。

1994 年 4 月 1 日 最初の発掘調査が長野原一本松遺跡で始まる。

繰り返される協定の変更

1994 年 4 月 1 日 埋蔵文化財発掘調査に関する協定の第一回変更

発掘調査の受託者が群馬県教育委員会委員長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更。

2005 年 4 月 1 日 第二回の変更

発掘調査の業務完了期日が 2005 年度から 2010 年度に延長。発掘対象面積は約 57 万㎡から 110 万㎡に拡大。

2008 年 3 月 31 日 第三回の変更

業務完了期日が 2015 年度に延長。発掘調査事業費 66 億円から 98 億円に増額。

発掘調査の問題点

発掘調査事業はハッ場ダムの関連事業の進行と連動して 1990 年代後半から 2000 年代にかけて拡大していく。2003 年には代替地に移転した長野原第一小学校の跡地(国交省 P R 館「やんば館」の隣)に県埋蔵文化財調査事業団のハッ場ダム調査事務所が設置され、ダム事業用地の各所では、地元住民が作業員として多数参加した発掘調査が行われてきた。

国交省が用地を取得すると、関連工事を開始するまでの間に発掘調査を終了しなければならない。国交省、群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者は、効率的に発掘調査事業を進めるため、毎月のように調整会議を開いてきた。群馬県教育委員会よりこのほど情報開示された調整会議の議事録により、これまで一般には知られてい

なかった発掘調査の問題点が浮かび上がってきた。(P 29～の議事録参照)

協議の過程で、群馬県は国交省に対して発掘調査には130億円かかるとしたが認められず、98億円に抑えられた。発掘調査の事業地面積は、当初協定の約57万㎡から2004年度には110万㎡とほぼ倍増し、さらに07年度の再確認では約136万㎡に膨らんでいた。調整会議の議事録は、98億円の枠内に収めるため無理な計画を立てていること、遺跡のランク付けをしていることを伝えている。事業費を抑えるためには、発掘対象面積を絞りこまざるをえない。事業費がこのまま据え置かれれば、遺跡の有無の確認にあたって、発掘面積の恣意的な縮小が行われる可能性がある。

ハッ場ダム予定地は浅間山の天明大噴火による泥流が流化したため、水没予定地全体が泥流に覆われており、全域が天明浅間災害遺跡と考えられる。当時の集落の全貌、土地利用のあり方を明らかにするためには、本来、全域を一帯の遺跡と捉え、発掘調査の対象と考えるべきだが、実際には本調査を実施するかどうか決めるための試掘の場所は限られており、試掘によって本調査不要とされる場所も少なくない。

わが国では、埋蔵文化財の発掘調査のほとんどが開発に伴う緊急調査であり、大学などによる学術調査は極めて少ないのが実状である。ハッ場ダム事業における発掘調査では、開発事業者である国土交通省の裁量で事業費、工期にタガがはめられ、文化財保護行政を担うべき文化庁の影は薄い。調整会議の議事録からは、国交省ハッ場ダム工事事務局が発掘調査の成果をまとめる整理事業に対する予算配分を渋ったり、発掘成果を公にしたい群馬県にブレーキをかけている様子が読み取れる。

文化庁では1998年、「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」と題する通知を出している。この文化庁通知は「埋蔵文化財は、国民の共通の財産であると同時に、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であり、その地域の歴史・文化環境を形作る重要な要素である」としながらも、その内容は全国で実施されている発掘調査の水準、今日の考古学の到達点からしても、きわめて問題のある内容となっている。多くの研究者が指摘しているように、開発にともなう事前調査では、近世以降については解釈と運用によって調査対象を狭めることが許容されているからである。

文化庁通知を受けて、群馬県では1999年に県の基準を示したが、ここではハッ場ダム予定地の天明浅間災害遺跡を念頭に、「浅間山起因による浅間A軽石層や泥流層を良好に遺存している地域にあっては遺跡の重要度に応じて、対象とすることができるものとする」という項目が設けられた。

行政の恣意的な調査対象の設定に対して、本来は有識者が警鐘を鳴らすべきだが、その役目を果たすべき県の文化財保護審議会も、行政にお墨付きを与えてきただけである。

ハッ場ダム本体工事の凍結による影響

2009年、民主党政権が誕生すると、前原誠司国土交通大臣（当時）がハッ場ダム事業の中止を宣言し、ダム本体工事が凍結された。これによって、すでに始まっていた水没予定地内の発掘調査は中断されることになった。当時、報道でもたびたび取り上げられた東宮遺跡（川原畑地区）、調査が始まったばかりの石川原遺跡（川原湯地区）も発

掘調査が中断された。その後、発掘調査の対象は、関連事業の用地に限られることとなり、事業費は縮小されていった。

八ッ場ダム本体工事の行方が不透明な状況にあって、水没予定地内の調査は今も中断されている。水没予定地内には現在も鉄道、国道、住宅があり、試掘されていない場所が多い。調整会議の議事録によれば、群馬県は水没予定地内で包蔵地が増える可能性があると認識しており、埋蔵文化財発掘調査事業の増額の可能性に言及している。また、国交省は八ッ場ダムの2015年度完成はないと群馬県に説明している。

今後、仮に八ッ場ダムの本体工事が再開された場合には、中断されてきた水没予定地内が発掘対象となるため、たとえ対象面積の恣意的な縮小が図られたとしても、調査期間が延長されるのは確実であり、調査費用も増大する可能性が高い。

〈参考文献〉

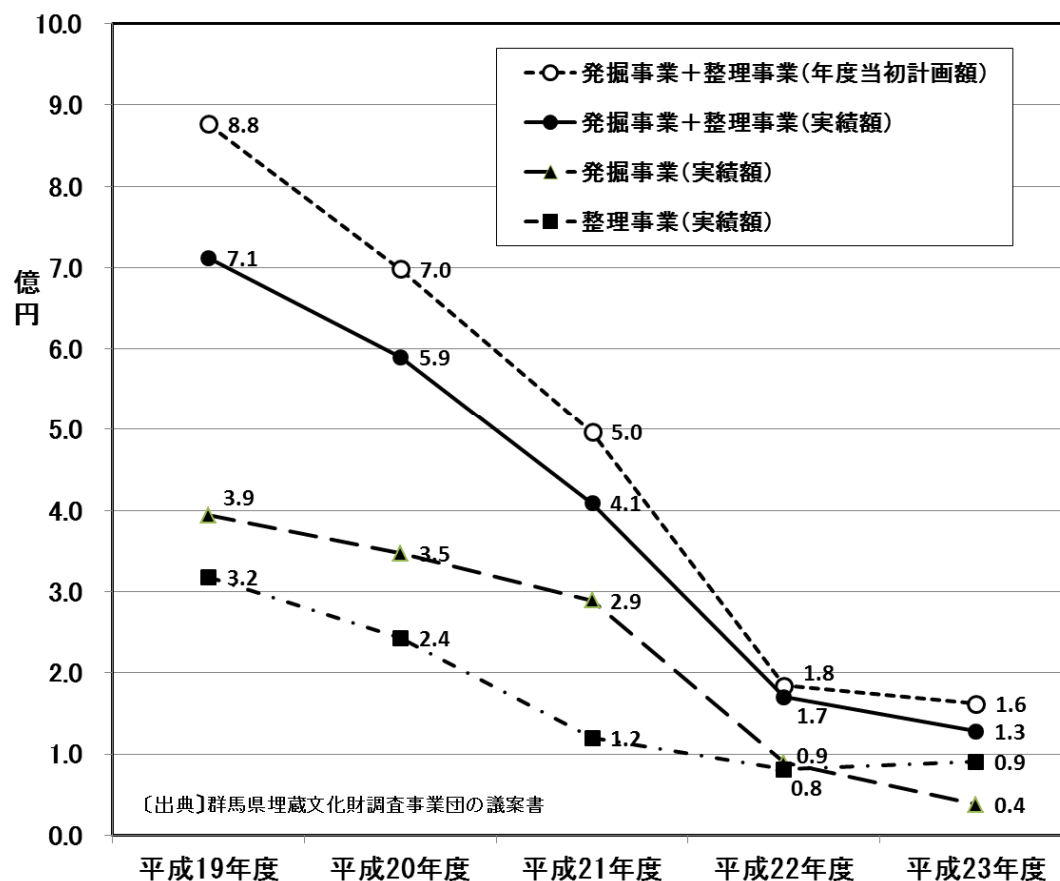
八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集、第2集、第3集、第38集(国土交通省、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)、

埋蔵文化財調査事業団年報(1995年～2011年)

八ッ場ダム関連埋蔵文化財調整会議議事録(群馬県開示資料)

「戦争遺跡をとおして考える遺跡と遺物」(菊池 実)

八ッ場ダム関係・遺跡調査の事業費の推移



2 ハッ場ダム関連地域の遺跡リスト

	町遺跡番号	遺跡名	ヨミガナ	時代区分
【川原畑】	1	温井Ⅰ	ぬくい	縄文・平安
	2	温井Ⅱ	ぬくい	縄文
	3	三平Ⅰ	さんだいら	縄文・弥生・平安
	4	三平Ⅱ	さんだいら	縄文・平安・中世
	5	上ノ平Ⅰ	うえのたいら	縄文・弥生・平安・中近世
	6	上ノ平Ⅱ	うえのたいら	不明
	7	西宮	にしみや	縄文・近世
	8	滑沢岩陰	なめさわいわかげ	縄文
	9	石畑岩陰Ⅰ	いしはたいわかげ	縄文
	10	石畑岩陰Ⅱ	いしはたいわかげ	不明
	11	二社平岩陰	じしゃだいらいわかげ	不明
	12	三ッ堂岩陰	みつどういわかげ	不明
	13	西宮岩陰	にしみやいわかげ	不明
	208	東宮	ひがしみや	近世、縄文
	209	二社平	じしゃだいら	縄文・平安・近世
	210	石畑	いしはた	縄文・弥生・近世
【川原湯】	16	川原湯中原Ⅰ	かわらゆなかはら	縄文
	17	石川原	いしがわら	縄文・近世
	18	川原湯中原Ⅱ	かわらゆなかはら	平安
	19	川原湯中原Ⅲ	かわらゆなかはら	縄文・平安
	20	北入	きたいれ	縄文
	23	川原湯勝沼	かわらゆかつぬま	縄文・古墳・平安・近世
	207	金花山砦跡	きんかざんとりであと	中世
	212	西ノ上	にしの上	近世
	217	下湯原	しもゆばら	中世・近世
【林】	37	立馬Ⅰ	だつめ	縄文・弥生・平安・中近世
	38	東原Ⅰ	ひがしはら	縄文・平安・中近世
	39	東原Ⅱ	ひがしはら	
	40	東原Ⅲ	ひがしはら	縄文・平安・中近世
	41	上原Ⅰ	うえはら	縄文・平安・近世
	42	上原Ⅱ	うえはら	平安
	43	上原Ⅲ	うえはら	平安
	44	上原Ⅳ	うえはら	縄文
	45	林中原Ⅰ	はやしなかはら	縄文・平安・近世
	46	林中原Ⅱ	はやしなかはら	縄文
	47	下田	しもだ	古代・中近世
	48	林宮原	ひがしみやはら	縄文・古墳・平安・中近世
	49	中棚Ⅰ	なかだな	縄文・近世
	50	楡木Ⅰ	にれぎ	縄文・平安
	51	楡木Ⅱ	にれぎ	縄文・平安・中近世
	52	二反沢	にたんざわ	中世・近世
	53	久森沢Ⅰ岩陰群	くもりさわいわかげぐん	不明
	54	久森沢Ⅱ岩陰	くもりさわいわかげ	不明

	55	滝沢観音岩陰	たきざわかんのんいわかげ	不明
	56	蜂ツ沢岩陰	はちつさいいわかげ	縄文
	57	御嶽山岩陰	おんたけさんいわかげ	不明
	59	林の御塚	はやしのおつか	縄文・近世
	202	楡木Ⅲ	にれぎ	縄文・弥生・平安・中世
	203	中棚Ⅱ	なかだな	近世
	204	下原	しもばら	縄文・古墳・平安・中近世
	204	下原Ⅱ	しもばら	縄文・弥生・古墳・平安・中近世
	205	花畑	はなばたけ	縄文・平安
	213	立馬Ⅱ	だつめ	縄文・弥生・平安・近世
	215	立馬Ⅲ	だつめ	縄文・平安・中近世
【横壁】	21	上野Ⅰ	うえの	縄文・平安
	22	上野Ⅱ	うえの	平安・近世
	23	横壁勝沼	よこかべかつめま	縄文・弥生・平安・中近世
	24	横壁中村	よこかべなかむら	縄文・弥生・平安・中近世
	26	山根Ⅰ	やまね	平安
	28	山根Ⅱ	やまね	平安・近世
	29	山根Ⅲ	やまね	縄文・弥生・平安・近世
	30	山根Ⅳ	やまね	縄文・平安
	31	西久保Ⅰ	にしくぼ	縄文・弥生・平安・中近世
	32	西久保Ⅱ	にしくぼ	平安
	33	西久保Ⅲ	にしくぼ	平安
	34	丸岩城跡	まるいわじょうあと	中世
	35	柳沢城跡	やなぎさわじょうあと	中世
	216	西久保Ⅳ	にしくぼ	近世
【長野原】	62	幸神	さいのかみ	縄文・平安・近世
	63	長野原一本松	ながのはらいっぽんまつ	縄文・弥生・古墳・平安・中近世
	85	長野原城跡	ながのはらじょうあと	
	200	久々戸	くぐど	縄文・近世
	201	尾坂	おさか	縄文・弥生・平安・近世
ダム予定地外 【東吾妻町】	96	廣石A	ひろいし	縄文、近世
	114	上郷西	かみごうにし	縄文、平安
		大柏木	おおかしわぎ	
		上郷A	かみごう	縄文～古代
		上郷B	かみごう	縄文・平安・中世・近世
		上郷岡原	かみごうおかのはら	縄文・弥生・平安・中近世

3 ハツ場ダム関係地域における各遺跡の発掘面積の経過（群馬県埋蔵文化財事業団の年報、事業団理事会議案書より作成）

（単位 m²）

〔注〕年度による発掘面積の重複を含む。

		平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	合計
ダム予定地の計		6,134	13,912	15,800	13,050	19,050	26,398	26,269	35,380	27,990	44,322	43,138	45,505	9,668	30,362	42,425	23,104	9,351	8,703	440,561
ダム予定地外の計		0	0	0	0	0	0	0	8,880	25,630	9,100	0	10,890	20,900	16,614	2,430	0	0	0	94,444
合計		6,134	13,912	15,800	13,050	19,050	26,398	26,269	44,260	53,620	53,422	43,138	56,395	30,568	46,976	44,855	23,104	9,351	8,703	535,005
町遺跡番号	遺跡名	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	合計
【川原畑】																				
1	温井Ⅰ																			
2	温井Ⅱ																			
3	三平Ⅰ					350						10,083	877							11,310
4	三平Ⅱ											**								
5	上ノ平Ⅰ													6,900	5,088					11,988
6	上ノ平Ⅱ																			
7	西宮															2,970				2,970
8	滑沢岩陰																			
9	石畑岩陰Ⅰ																			
10	石畑岩陰Ⅱ																			
11	二社平岩陰																			
12	三ツ堂岩陰																			
13	西宮岩陰																			
208	東宮		1,036		200										3,540	11,820	1,012			17,608
209	二社平					500														500
210	石畑					1,500														1,500
【川原湯】																				
16	川原湯中原Ⅰ																			
17	石川原															1,700				1,700
18	川原湯中原Ⅱ																			
19	川原湯中原Ⅲ																			
20	北入																			
23	川原湯勝沼				850						12,865	2,426								16,141
207	金花山岩跡																			
212	西ノ上									1,900										1,900
217	下湯原																			
【林】																				
37	立馬Ⅰ								25	3,130			2,938							6,093
38	東原Ⅰ					1,300										8472				9,772
39	東原Ⅱ															**				
40	東原Ⅲ															**	**			
41	上原Ⅰ																			
42	上原Ⅱ											311								311
43	上原Ⅲ																			
44	上原Ⅳ										890						1,826			2,716
45	林中原Ⅰ		280									1,415			9,874	618	1,945			14,132
46	林中原Ⅱ											**				3,203	5,858			9,061
47	下田																			
48	林宮原																			
49	中棚Ⅰ						480													480
50	楡木Ⅰ					1,500											3,018			4,518
51	楡木Ⅱ						1,300	10,690	1,865			1,130	3,812							18,797

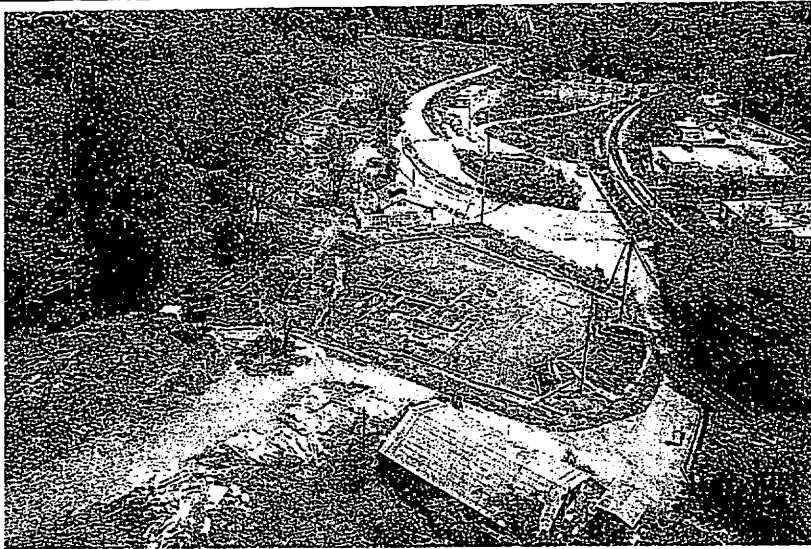
52	二反沢																		
53	久森沢Ⅰ岩陰群																		
54	久森沢Ⅱ岩陰																		
55	滝沢観音岩陰																		
56	蜂ツ沢岩陰																		
57	御嶽山岩陰																		
59	林の御塚																		
202	楡木Ⅲ																		
203	中棚Ⅱ						4,478	14,900		920									20,298
204	下原									5,844	9,650								15,494
204	下原Ⅱ							300											300
205	花畑				1,800	5,713	2,222												9,735
213	立馬Ⅱ								2,400										2,400
215	立馬Ⅲ														2,719				2,719
	久森					1,500													1,500
【横壁】																			
21	上野Ⅰ																		
22	上野Ⅱ																		
23	横壁勝沼																		
24	横壁中村			3,000	5,000	5,300	6,200	8,091	5,230	12,160	7,923	1,425	14,181	188					68,698
26	山根Ⅰ																		
28	山根Ⅱ																		
29	山根Ⅲ								900					280					1,180
30	山根Ⅳ																		
31	西久保Ⅰ				2,000														2,000
32	西久保Ⅱ																		
33	西久保Ⅲ																		
34	丸岩城跡																		
35	柳沢城跡																		
216	西久保Ⅳ															855		2,836	3,691
	横壁東		2,452																2,452
【長野原】																			
62	幸神			**	3,600					2,000			2,497						8,097
63	長野原一本松	6,134	10,044	12,800	1,800	1,300	1,478	788	12,160	6,400	9,550	16,698	21,200		1,650	1,589			103,591
85	長野原城跡																	5,867	5,867
200	久々戸				1,600	2,000	10,770				6,330								20,700
201	尾坂		100				457							2,300	7,491	12,053	8,590	9,351	40,342
	JR長野原草津口駅																		
ダム予定地外																			
【東吾妻町】																			
96	廣石A								980										980
114	上郷西														1,085				1,085
	大柏木																		
	上郷A										750				3,822	2,430			7,002
	上郷B								4,600	7,400									12,000
	上郷岡原								3,300	18,230	8,350			10,890	20,900	11,707			73,377

〔注〕 1) 三平Ⅰの16年度は三平Ⅱを含む。2) 林中原Ⅰの16年度は林中原Ⅱを含む。3) 林中原Ⅱの21年度は東原Ⅲを含む。4) 東原Ⅰの20年度は東原Ⅱ、Ⅲを含む。5) 横壁中村の12年度は他の遺跡を含む。6) 長野原一本松の6年度は他の遺跡、8年度は幸神を含む。5)**は発掘が行われたが、他の遺跡に発掘面積が含まれている遺跡を示す。

江戸時代の屋敷跡次々

東宮遺跡 伝承を裏付け

ハツ場ダム予定地

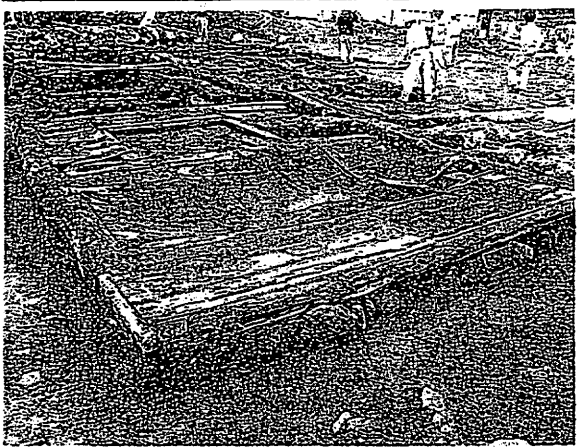


東宮遺跡を西側から望む＝長野原町川原畑、県埋蔵文化財調査事業団提供

国営ハツ場ダムの水没予定地ではかつて、豊かな農村生活が営まれていた。長野原町川原畑の東宮遺跡で、1783（天明3）年の浅間山の噴火によって引き起こされた泥流にのまれた集落跡が、前例のない規模で発掘されている。研究者は「貴重なとされる当時の山里の暮らしの定説を覆すような発見」と驚いている。（菅野雄介）

から1メートル以上掘り下げると、14棟の建物跡が姿を現した。特に研究者らの注目を集めたのが、東西20・2メートル、南北11・8メートルの大きな屋敷跡だった。近くをわき水が流れて泥に埋まった状態が保たれていたため、屋敷の半分以上の建築材やおけ、風呂が腐らず残っていた。当時の藁もみつかった。屋敷跡は「真空パック」のような状態になっていたという。

屋敷には広い座敷や板間、かまど、コタツ。囲炉裏も3カ所あった。さらに4〜5頭分の馬屋跡も。道を挟んだと



④東宮遺跡の屋敷跡にあった囲炉裏と上がりは、⑤東宮遺跡の屋敷跡から出土したおけ。肥大めとみられるという＝長野原町川原畑、いずれも県埋蔵文化財調査事業団提供

天明泥流 1783（天明3）年5月（旧暦4月）から小規模な噴火を繰り返していた浅間山が、同年8月5日（同7月8日）午前10時ごろ激しく噴火。土石などが裾野村鎌原の旧鎌原村を埋没させ、吾妻川に流入して泥流になった。国の中央防災会議がまとめた「天明浅間山噴火報告書」などによると、火口から約34キロ離れたハツ場には、波高50メートルを超す泥流が押し寄せたという。下流域も含め約1500人が犠牲になったとされる。うち計400人以上が長野原町内の住民だったと町誌は記す。

ころには蔵とみられる建物跡もあった。建物内に井戸が掘られ、たるに使う木栓も多数転がっていた。

「酒造りをやっていた家は、浅間押し（天明泥流）の時、馬5頭以上を酒を背負わせた逃げた」。この地の伝承が裏付けられた。

付近で掘り出された刷毛に墨で書かれていた「酒蔵用 天明二年 野口蔵」の文字や、土間から出てきた磁石に刻まれた屋号などからも、屋敷は名主などを務めた野口家のものだと思われる。

当時は幕府老中の田沼意次が権勢を振るった時代。商品・貨幣経済が発達し、商品作物の栽培が広がった。

東宮遺跡の埋蔵文化財は、当時の山村でも豪農が養蚕や酒造りを手がけ、交易が盛んだったことを推測させるとい

同遺跡はハツ場ダムの水没予定地で、現在は一時調査を中断している。94年にダム建設を前提に始まった予定地周辺の発掘調査の対象は約137万平方メートルに及び、総額98億円と20年を超す歳月をかけて

71カ所の遺跡を調べる。国土交通省などによると、費用は4600億円。ダム建設事業費からまかなっている。

水没予定地のほか、JR吾妻線や道路の用地、住民らの移転代償地などで順次、発掘が進められている。豊かな自然や山の恵みなどを反映し、吾妻川を挟んだ長野原一本松遺跡と横壁中村遺跡からは、縄文時代の堅穴住居跡がそれぞれ200軒以上発掘された。ほかの遺跡からも、約1万年前の縄文時代から弥生、平安などの各時代の住居や土器などが出土している。

これらの遺跡はダム湖の底に沈むか、道路建設などで消えるため、調査員らが遺物を掘り出し、記録保存に精を出している。調査関係者の一人は「貴重な遺跡が出たとしても、ダムを止めるわけにもいかない。そのままだせないのは仕方ない」と話している。

食うや食わすの 見方を覆す資料

松島栄治・端恋郷土資料館名誉館長の話 天明泥流の遺跡は20カ所以上発掘されているが、他とは比べものにならないほど東宮遺跡は資料が豊富だ。年貢に苦しみ、食うや食わすの生活だったという江戸時代の農民の生活レベルを覆すような豊かな生活がうかがえる。交通の便に恵まれていたとは言いがたい土地なのに、どうしてこんなに豊かだったのか。検討を加える必要がある。

4 ハッ場ダム関連地域の各遺跡の概要

〈参考資料〉群馬県埋蔵文化財事業団理事会議案書(情報開示資料)、群馬県埋蔵文化財事業団年報、ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、ハッ場ダム建設関連遺跡の試掘・発掘に関する財団法人埋蔵文化財事業団との協議・打合わせの議事録・復命書(情報開示資料)

	町遺跡 番号	遺跡名	遺跡の概要
【川原畑】	3	三平Ⅰ	標高約600mの吾妻川最上位段丘面にある湧水や溪流に恵まれた、数千年間利用された主要遺跡の一つ。縄文の竪穴住居2棟、土器、石器、平安の堀立柱建物3棟、土師器、須恵器などを検出。代替地造成に伴う調査。
	4	三平Ⅱ	縄文草創期から前期末までの土器と石器、古代の土坑(陥し穴)群、中世の堀立柱群などを検出。西の松葉沢、東の穴山沢に挟まれた舌状台地にあり、隣接する三平Ⅰ遺跡との間にイドクボと呼ばれる谷地がある。
	5	上ノ平Ⅰ	縄文時代の竪穴、敷石住居跡と土器、平安の竪穴住居、近世の墓坑群検出。標高約600mの吾妻川最上位段丘に位置する南向き傾斜地。三平遺跡に隣接。東に松葉沢、西に境沢、遺跡内に湧水地。代替地造成に伴う調査。
	7	西宮	20年度の調査で1m以上堆積した天明泥流下の畑跡、屋敷跡、災害後の復旧溝、ヤックラを検出。天明遺跡も調査済みは一部だが、その下に縄文遺跡がある。水没予定地内にあり、東宮遺跡の上流側に位置する。
	9	石畑岩陰	縄文時代草創期～晩期。吾妻渓谷上流部、ダムサイト予定地近くの水没予定地内(標高約520メートル)にあり、撚糸文、押型文などの土器群や獣骨出土。昭和53年度に群馬県、平成10年度に事業団が調査。
	208	東宮	1995年の「新発見の遺跡」。天明浅間災害による集落の全体像を明らかにする調査は21年度に中断されたが、極めて良好な依存状態で遺構遺物を大量に検出。その下に縄文遺跡。標高530～540mの水没予定地内にある。
	210	石畑	縄文前期中期の土器石器、弥生中期の土坑、近世の畑跡を検出。1990年代の「新発見の遺跡」。吾妻渓谷左岸の断崖にあり、ハッ場沢砂防工事の進入路に伴う調査。JR川原湯温泉駅の北東約300m、標高513～515mに位置する。
【川原湯】	17	石川原	20年度に1,700㎡のみ発掘調査後、ハッ場ダム本体工事凍結により調査中断。天明泥流、浅間軽石層に覆われた屋敷跡、畑跡、道検出。縄文の竪穴住居跡18軒、土坑、配石墓のほか、土器、石器60箱出土。水没予定地上湯原地区に位置する。
	23	川原湯勝沼	縄文時代晩期の埋壘2基、平安時代の住居跡、天明三年の畑跡、災害復旧時のヤックラ(石の片づけ場)道などを検出。標高530～545mの水没予定地にあり、南側に急峻な山地形が迫っているため、冬季の日照時間は極めて短い。
	212	西ノ上	天明泥流が60cm～1.2m堆積した畑、道の跡を検出。千歳橋の建設工事に伴う道路幅のみの狭い調査しか実施されていない。調査区内に縄文遺構存在の可能性がある。標高約520mの水没予定地に位置する。
【林】	37	立馬Ⅰ	縄文～中世にわたる遺構が密集。縄文中期前半～後半の住居、縄文早期包含層遺物多数出土。縄文晩期終末の竪穴住居、弥生中高後半の土器棺墓が特記される。縄文～平安時代の陥穴多数。防災ダム工事に伴う調査。
	38	東原Ⅰ	縄文前期～後期の土器や打製石斧、縄文～古代の陥し穴を検出。中近世では堀立柱建物と柱穴列が復元され、陶磁器などの遺物多数出土。吾妻川の上位段丘面、標高610～630mに位置。国道付け替えに伴う調査。
	39	東原Ⅱ	縄文前期～後期の土器出土。縄文遺構の陥し穴、中近世では堀立柱建物を復元。中世内耳土器のほか、近世では陶磁器、石器、金属器などの遺物が多数出土している。国道付け替えに伴う調査。
	40	東原Ⅲ	縄文早期～後期の土器多数出土。中近世の堀立柱建物、中世内耳土器や古瀬戸などの陶磁器も出土。東原Ⅰ、Ⅱ遺跡に隣接し、谷地形によって林中原Ⅱ遺跡と分かれている。国道付け替えに伴う調査、21年度調査終了。
	41	上原Ⅰ	9年度試掘調査で陥し穴を確認。24年度5月の試掘により、縄文時代の住居跡、カマド、土器片検出。集落が展開すると考えられるため、本調査必要と判断。土地改良事業に伴う調査。
	42	上原Ⅱ Ⅲ	23年度の調査で平安集落、鍛冶工房等を検出。
	44	上原Ⅳ	縄文後期の敷石住居のほか、竪穴住居、列石遺構、配石遺構や土坑を検出。縄文晩期終末期～弥生前期の土器もまとまって出土。標高645m前後に位置し、西側に押手沢が流れる。県道建設に伴う調査、21年度終了。
	45	林中原Ⅰ	縄文前期、中期住居、土器、打製石斧を出土。中近世の「林城」関連の溝、堀立柱建物跡、礎石建物跡、青白磁、馬骨など多数検出。標高630～635m。吾妻川の上位段丘面上に位置。町道建設に伴う調査、21年度終了。
	46	林中原Ⅱ	縄文中期後半～後期の大規模集落。縄文土器・石器多数、住居120軒以上、掘立柱建物、土坑、列石・集石遺構。土坑に焼人骨を確認。弥生土器、石器も多数検出。標高610～630m。国道付け替えに伴う調査、21年度終了。
	47	下田	天明浅間災害遺跡。天明屋敷跡・畑跡を検出。主な遺物は陶磁器、土人形、石器類、銅鏡、銭貨など。泥流層は約1.7mにおよぶ。畑跡に登壇らしき痕跡あり。工事用進入路建設に伴う調査。
	48	林宮原	24年度調査で中世の堀立柱建物、古代～近世の土坑、縄文土器、中近世の磁器の包含層を検出。地区コミュニティセンター、町道建設工事に伴う調査。吾妻川の上位段丘面、標高620m前後に位置する。

【林】	49	中棚Ⅰ	天明泥流堆積物下から畑、ヤックラ、石垣検出され、被災後の復旧状況を伝える資料も提供された。南面傾斜地で標高約543～565m、下原Ⅱ遺跡の上流にあり、水没予定地に位置する。
	50	楡木Ⅰ	縄文時代の土坑、平安時代の住居、かまど屋跡、土坑、掘立柱建物跡、溝、焼土、集石遺構など出土。。標高約633mに位置する。代替地造成に伴う調査、21年度に終了。
	51	楡木Ⅱ	縄文早期前半（燃糸系）の竪穴住居、埋竈をもつ前期住居、中期住居を検出。平安の竪穴住居、灰釉陶器、墨書磁器、中世の掘立柱建物検出。標高630～660m。県道、土地改良、墓地造成工事に伴う調査。
	52	二反沢	中世の石垣を伴う土坑、陶磁器片や軟質陶器片、石臼のほか、羽口、椀状滓など製鉄関連遺物が出土。14世紀末～16世紀初めとみられる。「大乘院堂跡」にあたり、標高632mに位置する。
	202	楡木Ⅲ	縄文土器、弥生土器を多数出土。縄文土器の中心は諸磯b、c式。弥生土器の中心は前期～中期前半。工食用進入路に伴う調査。
	203	中棚Ⅱ	天明浅間災害による畑跡、ヤックラ、石垣が検出され、被災直後の復旧、天明飢饉の状況が確認された。吾妻川下位段丘面の水没予定地にある。工食用進入路および残土置場整備工事に伴う調査。
	204	下原Ⅰ	平安時代の竪穴住居、天明泥流に埋もれた畑、道、石垣、溝の跡が比較的良好な状態で検出された。吾妻川の下位段丘面に位置し、標高約560mの緩傾斜地。残土置き場整備に伴う調査。
	204	下原Ⅱ	弥生土器、古墳、平安の竪穴住居、灰釉陶器、土師器、須恵器、墨書土器等出土。2m以上の天明泥流に覆われた田畑、溝、道、石垣、ヤックラを検出。標高535～550mの水没予定地。残土処理整備工事に伴う調査。
	205	花畑	主な遺構は縄文早期後半の土師器、須恵器、石器。縄文住居跡、土坑、陥し穴、平安の竪穴住居跡も検出。吾妻川の最上位段丘、標高653～667mに位置する。長野原第一小代替地造成に伴う調査。
	213	立馬Ⅱ	縄文草創期～早期の出土物多数、縄文中期初頭～前半の住居跡を発見。縄文～平安の陥し穴も多数検出。大量の縄文土器から、日本海、太平洋沿岸部の文化が内陸地域と影響しあっていた交流の歴史が読み取れる。
【横壁】	215	立馬Ⅲ	縄文早期～晩期、弥生、平安の遺物検出。縄文遺構は、早期～後期の竪穴住居跡のほか、子母口式、稲荷台式、沈線紋など早期の土器多数出土。立馬Ⅱ遺跡から谷を隔てた南西、標高650mに位置する。19年度調査終了
	23	横壁勝沼	縄文時代の陥し穴、土器、9世紀の建物住居跡、中近世の土坑墓、キセル、銭貨などを検出。代替地造成、護岸工事に伴う調査。
	24	横壁中村	縄文時代中期後半～後期の住居跡を中心に平安時代の住居も含め250軒以上検出した大規模集落跡。弥生初期の遺跡としても群馬県内有数。ダム水位予定下の標高570m前後。国道付け替え、代替地造成等に伴う調査。
	29	山根Ⅲ	横壁中村遺跡に隣接する小集落跡。縄文中期の竪穴住居、土坑、巨石遺構、中近世の溝を検出。山根と西久保の字境の深沢に面した傾斜地。南側山麓からの崩落土が堆積。横壁神社跡地含む。国道付け替えに伴う調査。
	31	西久保Ⅰ	縄文時代の住居跡、多種類の縄文、弥生土器、須恵器、石器、銭貨、小刀、水場を検出。洪水による居住の断絶を確認。中近世の溝、礎石建物跡も検出。標高約580mに位置する。小倉地区護岸工事に伴う調査。
【長野原】	216	西久保Ⅳ	50cm前後の天明泥流に覆われた畑、道路、溝などが確認された。吾妻川右岸の上位段丘面、標高約600mの斜面にある。JR付け替えに伴う調査。
	62	幸神	長野原一本松遺跡に隣接した小規模集落跡。縄文住居跡、縄文早期の土器、石器、平安畠跡を検出。標高約650mに位置する。代替地造成工事に伴う調査。
	63	長野原一本松	縄文中期後半～後期を中心とする大規模集落跡。住居約250軒、中世掘立柱建物跡等も多数検出。発掘調査は20年度に終了。長野原草津口駅北側、標高600～630mの上位段丘面にある。代替地造成に伴う調査。
	85	長野原城跡	23年度の発掘調査で天明泥流下に畑跡を検出。城が使われていた時代の煮炊き用の内耳の鍋も出土。県道建設に伴う調査。
	200	久々戸	天明浅間山噴火による軽石と最大2.5mの泥流に埋もれた畑、ヤックラ、石垣、草津みち等を検出。縄文遺物も出土。水没予定地にも含まれ、標高610mで天明泥流堆積天端を確認。県道、国道付け替えに伴う調査。
	201	尾坂	1～2mの天明泥流で埋没した屋敷と麻畑、溝などを検出。縄文土器、石器、住居、弥生土器、平安住居も検出。標高585m前後に位置する。吾妻線、国道付け替え工事等に伴う調査。長野原草津口駅に隣接。

5 ハッ場ダム予定地の遺跡の解説

ハッ場ダム予定地の遺跡の発掘事業を行っている群馬県埋蔵文化財事業団では、今年（2012年）5月から8月にかけて、水没予定地で発見された東宮遺跡の展示会が開かれました。展示会場に掲げられたハッ場ダム予定地の埋蔵文化財についての説明文がこの地域の特性を伝えていましたので、一部引用します。

「ハッ場地域は山間の国境にあり、しかも周囲を分水嶺で囲まれた特異な地域です。このことが、ハッ場地域の独自性をなおいっそう際立たせていると考えられます。

豊かな自然環境の中での縄文社会、稲作農業社会への独自の対応、平安時代の謎に満ちた活況、まぼろしの「三原庄」と滋野源氏一族、海野氏の土着、天明泥流のタイムカプセル。・・・これらの遺跡は、いずれも平野部の遺跡とは一味違った独自性を見せてくれるだけでなく、歴史の大きな流れに対して、地域がどのように対応したのかを私たちに示しているように思います。」

時代区分で見た時、ハッ場ダム予定地の遺跡の中で質量ともに最も豊富なのは、縄文時代と天明三年浅間災害の遺跡です。

1 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は長野原町に広範に分布しており、当時の人々が山の恵みを受けながら生活を営んでいた様子がうかがえます。

ハッ場ダム予定地では長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡がよく知られています。両遺跡ではともに 250 軒以上の住居跡が発見され、縄文中期後半から後期にかけての大規模集落の営みが明らかにされてきました。

また、2008～09 年にかけて発掘調査が行われた林中原Ⅱ遺跡においても、120 軒以上の住居跡がみつき、縄文中期から後期に至る大集落の存在が新たに確認されました。同じ林地区の楡木Ⅱ遺跡では、撚糸文期の竪穴住居 31 軒が確認され、県内はもとより全国でも希少な調査例とされています。縄文時代の遺跡としては、他にも東原遺跡、立馬遺跡、花畑遺跡、上ノ平遺跡、三平遺跡など数多くの遺跡があり、天明浅間災害遺跡の下に縄文時代の遺跡が埋もれている事例も少なくありません。

さらにダム予定地域で注目されるのは、岩陰遺跡の存在です。岩陰遺跡は地形的に限られた地域に立地するため、群馬県内でも確認された遺跡はわずかです。吾妻川流域は、そのほとんどが河川や沢に沿う山岳傾斜地帯で、急峻な山地もあることから岩陰遺跡が立地する好条件にあります。

当該地域で特に有名なのが縄文時代草創期、早期の石畑岩陰遺跡です。この遺跡は、吾妻溪谷のダムサイト予定地近くの水没予定地内にあり（標高約 520 メートル）、撚糸文、押型文

など様々な土器群やイノシシ、鹿の骨などが出土しています。

しかし、縄文時代の遺跡がこれほど豊富な地域でも、群馬県内で稲作農耕が始まる弥生時代中期後半になると、人々の活動の痕跡は途絶えてしまいます。この状況は、西吾妻地域全体に見られる傾向です。その後、八ッ場ダム予定地域に集落が戻るのは9世紀後半からです。

〈参考文献〉

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財報告書第1集、第23集、第35集、第37集

○ 横壁中村遺跡＝ 縄文時代後半【約4,000年前～3,000年前】＝

（事業団のHP 今月のトピック遺跡紹介 平成20年6月より）

横壁中村遺跡は、200軒以上の住居跡が発見された縄文時代の大規模な集落遺跡です。今年度は、そのなかの縄文時代後期の住居跡約50軒を整理しています。この時期の住居跡は、柄のついた手鏡のような平面形をしており、床に平らな石を敷きつめているため、「柄鏡形敷石住居跡」と呼ばれています。横壁中村遺跡でもこのタイプの住居跡が多く認められます。その中には出入り口にあたる部分から左右に「列石」を建設する例もあります。

住居跡は少しずつ位置を変えて何軒も重なって見つかり、繰り返し建て替えられています。この場所に、数百年にわたり継続して住み続けた結果と考えられます。

「列石」は大量の石を用いて築かれ、ところどころに「丸石」を置いたり、細長い石を立てて据えた「立石」が認められたりします。また列石の前にも、立石や丸石を中心に据えた「配石」がいくつも築かれており、呪術や祭祀に関わる遺構と考えられます。縄文人たちがどのような思いを込めてこのような住居跡や配石を築いたのか、謎解きはこれからです。



大規模な列石をともなう柄鏡形敷石住居跡（えかがみがたしきいしじゅうきょあと）



立石を中心とする配石

○ 長野原一本松(ながのはらいっぽんまつ)遺跡【ハツ場ダム関連】
＝ 縄文時代中期後半～後期前半【約4,500年前～3,500年前】＝

(事業団HP 今月のトピック遺跡紹介 平成19年9月より)

長野原一本松遺跡は、縄文時代中期～後期の集落跡が中心です。今年度の整理作業は、平成12年度～15年度に発掘調査を実施したものが対象です。

今回紹介する遺構は、敷石住居跡です。出入り口部（柄の部分）も敷石があり、住居連結部から小規模な列石が左右に伸びています。大変不思議な列石ですが、他の住居と繋ぐ例や出入り口部の左右空間を囲む例などが各地で報告されています。まだ性格がわかっていない施設です。床面中央には石囲い炉がありますが、炉の中から2個体の深鉢が上下に据えられた状態で見つかりました。土器は火の当たる部分が白く変色しています。ひんぱんに火を使った料理をしていたのでしょうか。



写真左:上記住居跡炉跡出土土器



写真右:上記住居跡炉跡出土土器

※土器の出土状況について

写真左の個体が逆位で上部、写真右の個体が正位で下部に位置して出土しました。下方から火が当たったと思われる部分は、白く変色しています。土器を上下に設置した調理は、蒸かし料理が想定されますが、残念ながら、写真右の個体は底部が欠損していました。

。

5区60号住居跡
南側に出入り口を向け、床
面敷石の周囲からは炭化材
が発見されました。



(2) 中世の遺跡

○ 横壁中村遺跡 中世の屋敷跡 =古文書に残らなかった中世=

(事業団HP 今月のトピック遺跡紹介 平成21年10月より)

横壁中村遺跡は、縄文時代の大規模な集落跡が出土したことで知られていますが、中世の遺構や遺物も多く見られます。ここでは、石垣を伴う中世の屋敷跡について紹介したいと思います。

横壁中村遺跡は、吾妻川に向かって緩やかに傾斜した地形上にあります。ここから石垣を伴う中世の屋敷跡が検出されました。石垣は1段に築造されていますが、低く傾斜した土地を整地して平坦にするために築かれたと考えられます。

この石垣に囲まれた中からは、9棟の掘立柱建物跡が検出されました。長軸が10mを超える大型建物も2棟ありましたが、それ以外は長軸5m程のものが大半でした。掘立柱建物跡相互の重複は比較的少なく、屋敷の存続期間は短かったと考えられます。屋敷跡から出土した陶磁器は15世紀を中心とするものが多い古とから、同時期頃の屋敷跡だと考えられます。

出土遺物には、当時の高級品であった中国産の陶磁器や瀬戸・美濃産の施釉陶器があります。高級品である陶磁器を使い、飾り、その権勢を示していた人たちが横壁の地にいたのでしょうか。そのほかに、多数の内耳土器(土鍋)・石臼や鉄製の鍬・刀の一部なども見られます。武器を携え、有事に備えていた人たちも、普段は平穏な毎日を送っていたのかも知れません。

山々に囲まれた横壁中村遺跡ですが、江戸時代においては信州街道、草津街道が通り、人々の往来は多かったと考えられています。これは、中世においても同様であったと思われ、交通の要所にあたる横壁の地に住んでいた人たちは、旧街道と何らかの関わりを持っていたことでしょう。15世紀は、武田信玄や真田氏が上州吾妻谷の城砦を攻める少し前にあたります。残念ながら、古文書の中に横壁の地について詳しく触れているものはありませんが、今回の発掘調査によって文献には残らなかった吾妻地域の中世の様相も、少しずつですが明らかになってきました。



写真1 中世の屋敷跡



写真2 屋敷跡の石垣

3 天明浅間災害遺跡

群馬県と長野県の県境に位置する浅間山は我が国有数の活火山です。ユネスコのリスク評価で国内では九州の桜島に次ぐ第2位の火山に位置づけられている浅間山は、広範囲に影響をもたらす噴火を過去に何度も繰り返してきました。中でも、江戸時代・天明三年（1783年）の大噴火は甚大な被害をもたらした火山災害として知られています。

天明三年の噴火は5月9日（以下新暦）に始まりました。8月5日には噴火活動が頂点に達し、土石なだれは泥流となって吾妻川を流れ下り、現在の群馬県渋川市で利根川に合流し、銚子沖や江戸湾にまで達します。

八ッ場ダム予定地は浅間山の火口から流下距離で23～28キロ前後の位置にあります。8月5日の噴火後、泥流は発生からおよそ20～30分でダム予定地に到達したものと推定され、犠牲者は川原畑村4名、川原湯14名、林村17名などとされています。

この時の泥流堆積物層がダム予定地を1～2メートル覆っており、泥流によって当日の生活と被災状況が封印されることになりました。事業用地に遺跡が確認されることは珍しいことではありませんが、八ッ場ダムの水没予定地の場合は、全域が天明3年の泥流堆積物に覆われているため、事業用地の中に遺跡があるというより、遺跡の中にダムの水没予定地がある、といった方がふさわしいといえます。

現在までに確認されたダム予定地内の天明浅間災害遺跡は、P17～18の遺跡のうち16遺跡に上り、今後、遺跡数はさらに増加する可能性があります。これらの遺跡の発掘調査によって、当時の人々が災害直後から礫や砂をどかし、田畑をつくり直し、懸命に復興に努めたことを二百年以上たった現在、土の中からまざまざと蘇らせることになりました。

田畑の丹念な調査は、大噴火の前兆である軽石や灰が降る中、当時の人々が農事暦にのっとって農作業を続けようとしていたことや、それでも作柄が著しく不良であったこと、そうした厳しい状況にあつて人々が災害直後から礫や砂をどかし、田畑をつくり直し、懸命に復興に努めたことを二百年以上たった現在、土の中からまざまざと蘇らせることになりました。

また、水没予定地の川原畑地区の東宮遺跡では、2007年から始まった本格的な調査で15棟の建物跡が姿を現し、その保存状態の良さが当初から大いに注目されました。1783年当時の川原畑村は、酒造業、養蚕、麻栽培なども行われる活気ある村であったことが明らかとなり、群馬県内の新聞では「貧しいとされた当時の山里の暮らしぶりを覆すような発見」と報道されました。

さらに、災害遺跡の発掘調査は、流域に大きな被害をもたらした泥流のメカニズムを解明する資料を提供することとなり、将来の災害に備えた防災の観点からも、貴重な知見を集積しつつあります。

道路などの関連工事の用地にある遺跡は、発掘調査が終わるとただちに工事が始まり、その痕跡は見えなくなってしまいますが、水没予定地の遺跡は、調査が終了すれば埋め戻され、今も天明三年当時の人々が毎日眺め暮した山々に囲まれています。苦難の歴史を後世に伝える天明浅間災害遺跡は、埋蔵文化財事業団の報告集にもあるように、「その地に眠る先代の

人々の姿をよみがえらせることを通して、地域に対する愛着や誇りをもたらす素材を提供」(小野宇三郎事業団理事長)しているのです。ダム事業が中止になり、水没予定地が水没を免れることになった時には、これらの貴重な文化財は地域の宝として活かされ、地域振興の柱となる可能性を秘めています。東日本大震災を経て、復興の問題に直面している私たちにとって、ハッ場ダム予定地の災害遺跡は決して過去の遺物ではありません。

最後に事業団で発掘調査に携わった関俊明氏のご著書「浅間山大噴火の爪痕」より、最終章を転載させていただきます。

―日本のポンペイを創りたい

天明三年の発掘調査にかかわり、火山災害をはじめ災害と人びとはどうむきあうかについて興味をもちながら、「天明三年」を追いかけてきた。

災害を継承する・語り継ぐとは、「供養」の気持ちを増大させることでもある。このことはつぎの世代に伝えることと同時に、先人の苦労や努力に感謝しつつ、現生を生きる自分たちの暮らしをよりよい方向へ向かわせる力をもっている。

考古学を通して市民に伝えられることがあると思う。文化が多様化し、家族や隣人との疎遠さがこれほど広がってしまっている今日の社会状況のなかで、過去の出来事を語り継ぐことの難しさはいまでもないだろう。習慣や伝統と同じく、意識されなければ消え失せていってしまうことでもあろう。そこであえて負の遺産ともいえる災害の傷跡を残して、人びとの目にとどめる工夫があってよいのではないか。(図：神戸港震災メモリアルパーク)

天明三年浅間災害にかかわる行事や風習といった文化として語り継がれてきたこと、それに加え災害の伝承、災害地形や遺跡・記念物・景観など、地域に広がる「サテライト地点」ともいうべき場所をつないでいきたい。そして、ひとつの空間博物館・フィールドミュージアム的な発想を模索していきたいと考えている。「日本のポンペイ」を創って、情報発信をしていくことをつぎのテーマとしていこう。

二二七年目の八月五日

合掌

〈参考文献〉

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第三集、「浅間山大噴火の爪痕―天明三年浅間災害遺跡」(新泉社、関俊明著、2010年)、長野原町誌

○ 東宮遺跡＝浅間山泥流下から出土した江戸時代の行灯(あんどん)＝

(事業団HP 今月のトピック遺跡紹介 平成22年6月より)

天明三年(1783年)の浅間山大噴火に伴う泥流で被災した東宮遺跡からは、多くの偶然が重なった結果、通常では朽ちて消滅してしまうような木製品が数多く出土しています。それらは、220年以上も地中に埋もれていたとは思えないような残りの良いものばかりです。

それらの中には用途のわからない木製品もありますが、整理作業が進む中で、その一部が組み上がり道具類となることが確認できました。ここで紹介する行灯(あんどん)も、その

中のひとつです。底板のない台形状の箱を土台に、4本の細い棒状の柱が四隅に打ち込まれるように立ちます。4本の柱の上には、持ち運べるように把手が付いていたかもしれません。土台天板の中央には幅1cm、長さ2cmほどの孔（あな）があり、そこに灯明皿を受ける部分が接合します。十字に組んだ部分に灯明皿を載せていたのでしょう。各所には木釘が打ち込まれ、固定されていたことも確認できます。



写真 出土した行灯

○ 東宮遺跡～ハッ場で発掘された江戸時代

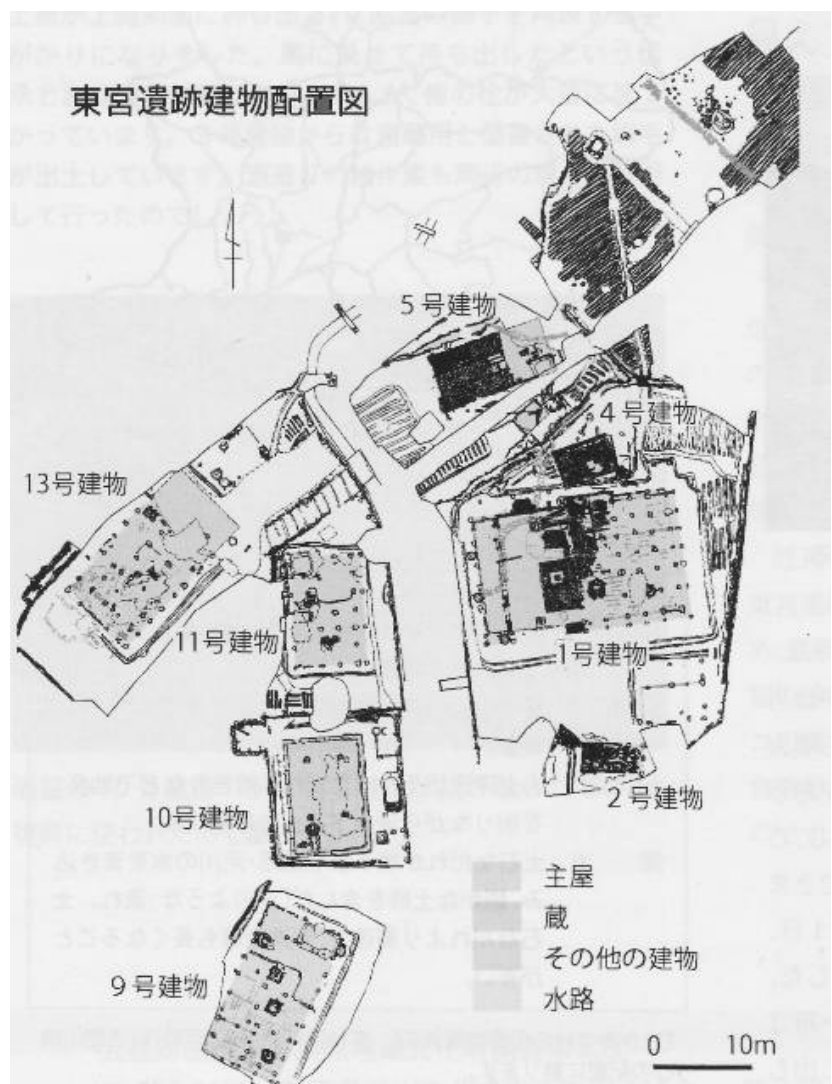
（事業団 平成24年度 最新情報展 第1期より）

東宮遺跡建物配置図

発掘調査で主屋建物7棟、酒蔵1棟など、全部で15棟の建物を調査し、このうち主屋の1・5号建物と1号建物に付随する4号建物が板の間まで残存していました。

主屋建物は崖に接した斜面際にありました。日当たりの良い広い場所を畑にし、主屋では裏手に湧水を流す水路を作り、洗い場に使う生活の知恵がうかがえます。

豊富な湧水は遺跡の木材などを保存する役目を果たし、200年以上を経過した私たちに驚くほどリアルな江戸時代の様子を伝えてくれました。



下駄

最も多く出土した木製品の一つです。このことから当時の様子が想像できます。往還の人々の立ち寄る機会が多く、下駄が数多く置かれていたのかもしれませんが。噴火を心配した村人が集まった所に泥流が発生し、裸足で逃げ出したのかもしれませんが。付近は湧水が多く、冬は雪や凍土で必需品の下駄はいつでも用意されていたと考えられます。東宮遺跡の性格を解き明かすため、下駄は重要な遺物となりそうです。



酒造り

10号建物は東宮遺跡唯一の蔵造り建物です。土壁が上側斜面に押し出され、泥流の様子を再現する手がかりになりました。馬に乗せて持ち出したという伝承とおり酒樽は見つかりませんが、櫓の栓が大量に見つかっています。9号建物からは酒蔵用と墨書された刷毛が出土しています。酒造りの諸作業も周辺の家々が分担して行つたのでしょう。



キセル

江戸時代の遺跡からキセルは多数出土しますが、刻みタバコをつめたまま火を着けずに出土した例は聞いたことがありません。13号建物の雁首（がんくび）は、まさに泥流発生時の混乱を示す遺物のように思えます。



見えてきた江戸時代山村の生活

“山村=貧しい生活というイメージを持っていませんか。東宮遺跡で次々に現れた建物の様子や出土遺物が、想像をはるかに超える豊かさを示し、復元作業や分析作業がそれを裏付けていきました。

江戸時代、贅沢品の絹を量産させないため、桑は通常、畑境など限られた場所でのみ栽培が許されましたが、山の斜面では制約なくマコを生産できました。また1号建物は数頭の馬を飼育し、運送業も行つたと考えられます。

酒造り。麻栽培などを加えたこれらの生業が豊かな川原畑村を生み出したと想像できます。江戸のリサイクル社会という言葉をよく耳にします。

東宮遺跡でもその様子は見て取れます。陶磁器類をはじめ、鉄鍋、桶など多数の補修痕跡が残っています。人や家畜の排せつ物は少しも無駄なく集められています。カイコの糞さえ捨てずに堆肥にするようです。発掘された東宮遺跡には江戸時代の“モノ”を大切にする精神が見えるのです。

○ 石川原遺跡(いしかわらいせき)の天明三年遺跡

(事業団HP 発掘遺跡の最新情報 平成20年9月調査より)

調査場所

吾妻郡長野原町大字川原湯字石川原地内

調査期間

平成20年8月1日～平成20年10月31日

主な時代

縄文時代・江戸時代(天明三年)

遺跡の内容

石川原遺跡は長野原町の吾妻川右岸の中位段丘に位置します。

8月18日から発掘調査に着手し、天明三(1783)年の泥流下から一軒の屋敷とその周囲に畑が検出されました。

屋敷は間口7間、奥行4間の当時としては一般的なもので、西側に土間と馬屋がありました。屋敷の南側に広がる庭には軽石の痕跡がなく降下後に片付けられたと思われます。周辺の大部分の畑は畝が密接しているため麻畑と思われますが、屋敷前の一画だけは畝が高いため家庭菜園かと思われます。現在調査は2面目に入り縄文の調査中です。



調査区全景写真(空撮、上が東)



作業風景(畑検出、北西より)

「吾妻川流域の天明3年浅間災害に関する遺跡」

(「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」調査報告書 2003 年より)

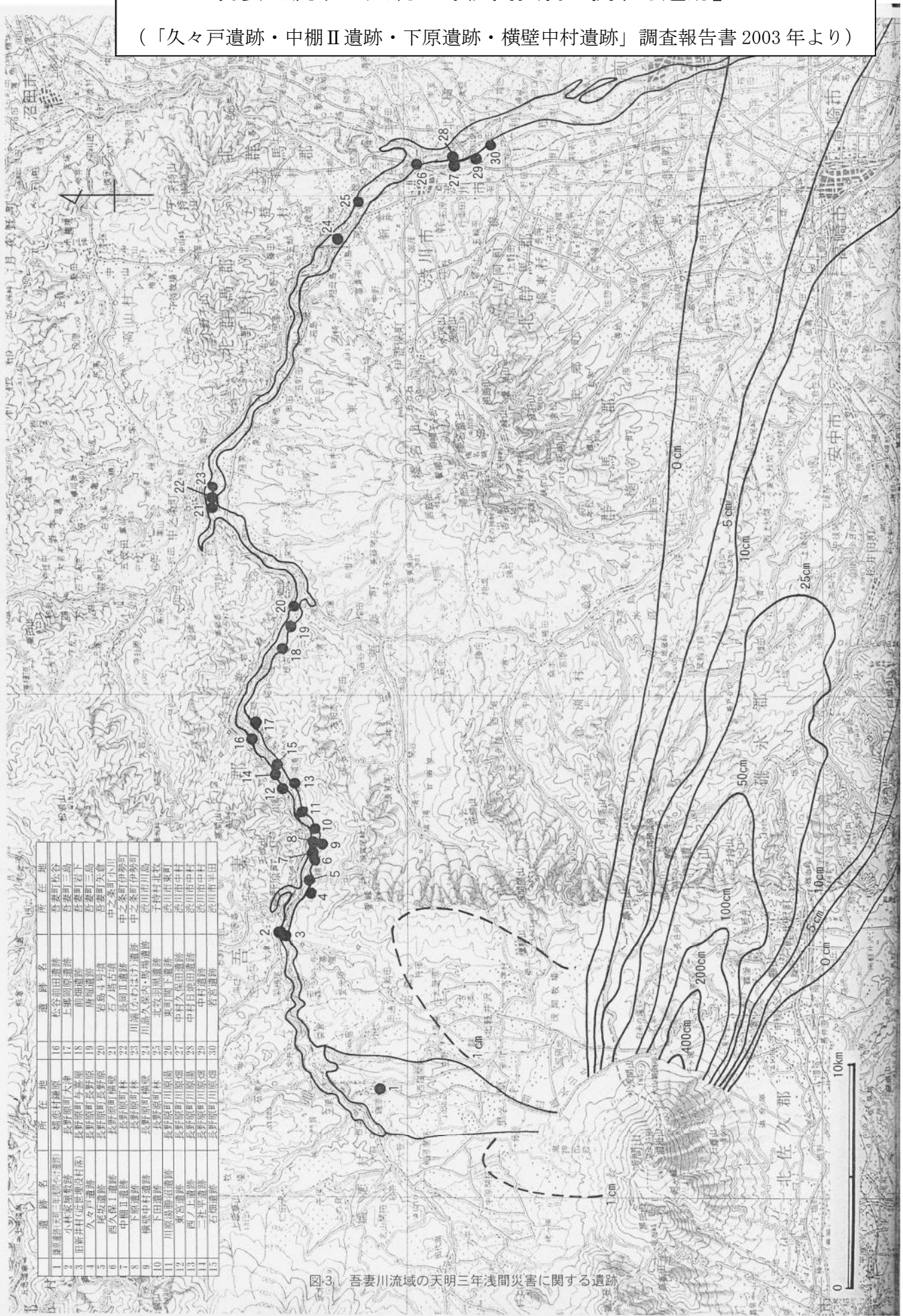


図3 吾妻川流域の天明三年浅間災害に関する遺跡

7 群馬県情報開示資料から

ハッ場ダム予定地の埋蔵文化財調査の実態を追う

群馬県情報開示資料：ハッ場ダム建設事業関連遺跡の試掘・発掘に関する国交省ハッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団による会議録

＊平成 19 年度第 8 回調整会議の議事録は、保管していないとの理由で開示されず。

国：国土交通省ハッ場ダム工事事務所担当者の発言、県：群馬県教育委員会担当者の発言、事：群馬県埋蔵文化財調査事業団担当者の発言

文中の〔注〕はハッ場あしたの会のコメント、太字はハッ場あしたの会。

1 増額をなかなか認めない国交省（平成 19 年度開示資料より）

〔注〕平成 16 年度のハッ場ダム基本計画の変更（事業費増額）によって、埋蔵文化財調査費も増額されたが、国交省、群馬県、事業団の三者協定では、調査費は 66 億円のままであり、残額はゼロになっていた。ようやく平成 20 年 3 月に 66 億円から 98 億円の増額されたが、この 98 億円も本来必要な調査費用 130 億円を大きくカットされた金額であった。

【平成 19 年 4 月 24 日】 ハッ場ダム関連埋文定例会議 （県）

○発掘調査費用について 現在当初(平成 6 年度)協定の総額 604,000 千円(注:66 億円の誤り?)で調査を進めている。**今年度で残額 0 になる。**平成 15 年 11 月の第 2 回ハッ場ダム基本計画の変更(注:決定は平成 16 年度)で、事業費埋文調査が総額 980,000 千円(注:98 億円の誤り?)となった。

○(98 億は文化財保護課の提示ではない。100 億では高いからの理由?)

○平成 19 年 2 月、埋文事業団と調整し、今後の経費を含め総額 1,300,000 千円(130 億円の誤り?)を国交省に提示。

【平成 19 年 5 月 15 日、21 日】 19 年度ハッ場ダム発掘調査開始の現状について（県）

○ハッ場ダム工事事務所専門職へー発掘調査体制は整っている。用地調整が整えば早急に入る。

○埋蔵文化財調査事務所長へーハッ場の調査の特徴として、用地解決を待っている調査は進まない。先へ先への対応をしなければならない。

【平成 19 年 5 月 25 日】 19 年度第 2 回調整会議

○19 年度埋文事業団と国交省の契約について

調査費用総額 98 億円の内容提示が無ければ、今年度の契約は行わない(国交省関東整備局が判を押さない)。(国)

○要検討事項等（県） 埋文総事業費

①案 98 億円で行うとするのか、

②案 98 億の内訳を提示し、133 億となることで了解を求めるか。

【平成 19 年 6 月 26 日】 19 年度第 3 回調整会議

○98 億円を超えた協定の変更はできない。（国）

【平成 19 年 7 月 24 日】 19 年度第 4 回調整会議

○協定変更について（国）

平成 18 年度に実施した上郷岡原遺跡の天明泥流の除去費用が 1 億円なので、これを減額すると 97 億円。測量調査費の中で文化財経費が突出しているの、工事費から捻出したのであるが、発掘調査にかかった経費なので、文化財協定金額から負担するのは当然。

【平成 19 年 9 月 20 日】 19 年度第 6 回調整会議

○総額経費関連

プラス要素としては、遺構量多し、97 億円より増額が必要である。（県）

→ダム完成後の管理費で資料整理は対応できないか。20 億円のうち 7～8 億円が文化財経費で、工事調査・設計ができなくなっている。現状では、平成 22 年 3 月の期間延長と総経費 97 億円は変更しがたい。（国）

○ダム事業の現状と文化財経費

平成 19 年度で埋文調査は 45%未満の完成率である。（県）

【平成 20 年 2 月 15 日】 第 9 回調整会議

○総事業費 98 億円（消費税を含む） *98 億円に抑えるため、無理な設計をしている。（県）

○事業地面積の変更経過 当初協定が約 57 万㎡で、平成 16 年度に 110 万㎡に増加したことを文書で確認した。今年度の再確認で約 136 万㎡となった。今回の協定の変更に伴い、98 億円に収めるため、遺構想定のもとに遺跡のランク付けをしている。厳しく見直しを行い、経費を 98 億円に合わせている。（県）

○進捗状況：計画書では本調査実施済み表面積は、約 44 万㎡である。試掘調査等で約 33 万㎡減少した。残り調査面積は 59 万㎡である。その内、「調査予想面積」は約 1/2 の約 27 万㎡である。よって本調査終了面積と試掘調査等で減少した面積を調査終了面積とすると、全体の約 57%が終了したことになる。

【平成 20 年 3 月 18 日】 第 10 回調整会議

○3 月 3 日協定変更協議書を国交省・埋文事業団に通知。3 月 11 日 国交省より変更修正依頼あり。その後、「発掘調査事業費の増減」の文言を入れることで再三国交省と協議を行う。3 月 17 日「発掘調査事業費の増減」の文言を入れることとなった。（県）

2 地権者との関係による発掘調査の遅れ(平成 20 年度の開示資料より)

〈注〉発掘調査に当たって、用地取得、プレハブ小屋の設置、墓地、重機の搬入などで地権者、近隣住民との間にしばしばトラブルが発生している。

作業効率のロスを省くため、遺跡を細かく区分し、作業員を無駄なく振り向けるために、国交省と群馬県の調整が頻繁に行われている。発掘調査の直前まで用地が入手できず、予定が立たなかったり、予定を変更することが多い。

【平成 20 年 4 月 15 日】 20 年度第 1 回調整会議

ハッ場ダムの工期も 5 年延長となり、ここが正念場である。埋文の調査が終了しないと工事も進まないの、よく調整して調査を終了できるよう進めたい。(国)

【平成 20 年 7 月 22 日】 20 年度第 4 回調整会議

○石川原遺跡(注：川原湯地区上湯原)：地元説明が難航し、着手時期が不鮮明。(県)

○東原遺跡：発掘調査で墓地が壊されたとの連絡があり、地元とのトラブルが発生。(県)

【平成 20 年 9 月 24 日】 20 年度第 6 回調整会議

○林中原Ⅱ遺跡：全面解決とはいかないが、使用貸借の形で調整。2、3 月に次年度調査予定箇所の表土掘削を先行してできないか。解決済み用地＝国交省取得用地での春野菜の作付け防止の対策として。(国)

→次年度事業との関連などもあるので、追って確認・調整したい。(県、事業団)

【平成 20 年 10 月 21 日】 20 年度第 7 回調整会議

○石川原遺跡：縄文住居 18 軒、配石墓 5 基、土坑 100 基、列石など確認し、大集落の可能性あり。

【平成 20 年 11 月 20 日】 20 年度第 8 回調整会議

★協議事項 次年度調査予定について

これまでに東宮遺跡、西宮遺跡、下田遺跡、上原Ⅳ遺跡、石川原遺跡などが上がっているが、県道事業の上原Ⅳ遺跡以外は水没予定地対象である。

横壁地区には未解決用地(山根Ⅲ)がまだあり、これが解決すれば早急の対象となる

【平成 20 年 12 月 24 日】 20 年度第 9 回調整会議

○林中原遺跡：町道部分の用地内に一部麦を蒔かれてしまった。(国)

○次年度調査工程について

当初 5 億の提示がさらに 3 千万円減の 4 億 7 千万円となったことも踏まえ、現状では整理班を 1 班減として、この担当を上半期の 6 ヶ月現場にあてる案で、年度当初に 3 班分の動きがとれるよう検討・調整している。(県)

予算が本体工事の測量関係に当てられた関係で、申し訳なく思っているところもあるので、よ

ろしく調整をお願いしたい。(国)

○東宮西宮と合同で12月11～12日、川原畑住民向け現地説明会。32人参加。NHK取材。

3 難航する発掘調査、細る予算(平成21年度開示資料より)

〈注〉水没予定地の発掘調査(川原畑地区:東宮など)が政権交代で中断。ダム本体工事により測量・調査費が大きく減額され、測量・調査費から支出されていた発掘調査費も減額となったと国交省は説明。

【平成21年6月23日】 21年度第3回調整会議

○包蔵地外においても工事を行う場合、試掘・確認調査などが必要であることの確認。(県)→現在、行っている工事の多くは既に手のついた箇所が多く、まるっきり新しい地点は少ない。(国)

【平成21年7月22日】 21年度第4回調整会議

○林中原Ⅱ遺跡 縄文時代の焼人骨が出土している。新聞発表を考えている。(事業団)
→発表は奨励もしないが止めもしない。隠していると思われるのは困る。(国)
縄文時代の人骨について、国内でも稀な例である。(県)

【平成21年9月8日】 21年度第5回調整会議

○林中原Ⅱ遺跡の出土人骨の新聞発表について
発表時期については、どのようにしたらよいか(事業団)
→国交省内で相談する。政権交代に関連して、基本的に生活再建に関する事業はすすめる。ダム本体も入札延期であり、中止ではない。新大臣が決定し、指示を仰ぐ。水没地については、今は言える段階にない。(国)

【平成21年10月27日】 21年度第6回調整会議

○東宮・西宮一調査終了していないが、埋め戻して引き渡す。水没等する場合は再調査(県)

【平成22年1月13日】 21年度第8回調整会議

○平成22年度予算案
発掘の経費は測量・調査費でまかなっている。総額では本体工事費を除くほぼ満額ついたが、生活再建に重点を置くため、測量・調査費は大きく減額される公算が高い。よって埋文の予算も厳しい。(国)

【平成22年2月9日】 21年度第9回調整会議

○来年度の事業費については、埋文関連で1億円も厳しいと見込まれる。(国)
前回の会議では、2.1億円程度の積算でいたが、調査面積により班体制を見直した結果、1.7億円ほど必要となっている。これ以下になると、事業団の整理補助員の解雇等の問題も生じてく

る。実際に1億円を切ることであれば、補助員を解雇するだけでなく、ハッ場ダム調査事務所の閉鎖も考える必要が出てくる（県）

【平成22年3月1日】 平成22年度事業計画について（協議）

○平成22年度の事業については、前回の定例会議で1億円以下という話をしたが、他と調整して、なんとか1,7億円用意する。これで、事務所の維持と発掘をお願いしたい。（国）

4 事業費の増額が認められない埋文調査（平成22年度開示資料より）

〈注〉国交省は整理事業の予算圧縮を希望し、報告書の発行部数が減少。群馬県埋蔵文化事業団は毎回会議で、すでに発掘調査が終了した遺跡の整理事業のための予算確保を要望するが、国交省の反応は鈍い。

当該年度の発掘調査は尾坂遺跡のみ。都県の負担金凍結を理由として、調査費用の支払いも遅れる。資金切迫で人員確保も難しい。

ダム本体工事再開の場合、水没予定地の発掘調査が始まると調査事業費が増える可能性があるが群馬県は言うが、国交省は増額の可能性を否定。あくまで98億円の枠内。

【平成22年4月20日】 22年度第1回調整会議

○整理（事業）のウエイトが高くなると、（関東地方整備）局の中の目が非常に厳しい。（国）

○課題と報告（県）

事業経費が少ないために実施できる事業量が少なく、担当職員が昨年度担当8.5人から4人、庶務担当1人からゼロ（本部の総務部で事務担当）と半分以下に大きく減少。

今後ダム建設がなくなれば、発掘対象面積が大きく減少するが、発掘調査の終了している遺跡の整理事業が約20班弱残っている。工事が行われる水没しない遺跡の発掘もまだ残っているので、発掘が必要である。

【平成22年5月26日】 22年度第2回調整会議

○尾坂遺跡：用地に作物の植え付けをされてしまったため、6月中旬以降に調査可能となる見込み。（国）

○全体的課題 本年度の契約は、予算・期間に縛りがある。すべて調査終了とはならないことも考えられる。その場合、JR,国道の付替え、町道部分については確実に終わらせて、その他は、調査継続となることも考えられる。（県）

→それでよい。（国）

【平成22年6月22日】 22年度第3回調整会議

○湖面1号橋 P3,4 進入路試掘→泥流下遺構あり。本調査必要。今回の試掘・立会により、遺跡が確認されたため川原湯駅周辺一帯を包蔵地化した。（下湯原遺跡 6/2 付）（県）

【平成22年7月30日】 22年度第4回調整会議

- 来年度予算確保について 今年度（約1.7億円）以上つけることは難しい。（国）
 - 協定期間の27年度までに整理まで終了するとなると、年平均4班は整理していく必要がある。それだけで1.2~1.3億円。さらに発掘となると1.7億円では厳しい。（県）
 - 発掘はそれほどないと思われる。（国）
 - 包蔵地が増えると、協定書の総額には影響があるのか（国）
 - 場合によっては増額が必要になることも考えられる。（県）
 - 増額はかなり厳しい。（国）
 - 水没予定地については、まだ試掘等が行われていない箇所があるため、包蔵地はまだ増える可能性もある。（県）→水没地については、今は試掘できない。（国）

【平成22年8月31日】 22年度第5回調整会議

- 平成22年度の調査工程について 今年度契約の執行状況を検討したところ、尾坂遺跡のJR用地（28区）の部分まで調査終了するとなると、今年度契約額では不足しそうな状況。増額変更は可能か。（県）
 - 会議後、国交省担当者からメールが届き、増額できそうである。（県）

○会計検査について 9/14~17実施 20、21年度分

談合の話とかもあり、契約の関係が中心となりそうである。会計検査が入ることは、他に口外しないでほしい。（国）

【平成22年10月6日】 22年度第6回調整会議

- 10月分（4,292万）を1月に払えるかわからない。（国）
 - それでは尾坂遺跡の調査延期の話も振り出しに戻ってしまう。早急に確認を。10/8現在、確認取れず。（県）
 - 今年度は限界を超えて実施しているようなものであり、27年の協定期間内に整理を終了させることを考えて計画的に実施して行きたい。突然10班整理しろと言われても対応できるものではない。（県）
 - （関東地方整備）局の方で、整理の重要性をなかなか理解してくれない。（国）

【平成22年11月17日】 22年度第7回調整会議

- （平成23年度の）予算はどの程度になりそうか。（県）
 - 今年度と同じくらいではないか。ただし、本年度は測量設計費で要求したが、来年度は工事費で要求した。今年度よりは、多少融通を利かせやすいと思う。（国）
- *参考：昨年度協議では、測量設計費の総額が10億円程度の中で発掘・整理費用が何割も占めるということに対する抵抗も感じられた。工事費であれば、費目の中での相対的な比率は低下するために、変更したものと考えられる。（県）

【平成22年12月14日】 22年度第8回調整会議

○報告書部数も300部に変更して計算してある（県）

→委託者に対する報告書は2部でよい。（現在3部）（国）

→委託者への配布は、委託者の必要数ということになると思われる。（県）

【平成23年1月25日】 22年度第9回調整会議

○課題と報告（県）

・下流域の負担金支払い保留を主な理由として、当初契約の資金計画書による10月支払い分4249万円が1月支払いとなる。1月中の支払いをお願いします。

・資金が切迫しており、当初契約に基づく資金計画書による1月支払い分17,039,200円（注：1.7億円の誤り？）を2月に支払っていただけるよう、お願いします。

【平成23年3月18日】 22年度第11回調整会議

○残りの整理工程を示して欲しい。（国）

→年間の予算がわからない現状では、案の作りようがない。現状の整理予算では、27年度までに終了するのは無理である。整理の予算については、必要な資料は提示するので、局の理解を是非得てもらいたい。現段階では、総額は98億円になっている。ダム再開になった場合、増額できる可能性はあるか（県）→可能性はほとんどない（国）

5 発掘予定地の大幅減少（平成23年度開示資料より）

（注）試掘により、発掘予定地が大幅に減少し、9月は発掘なし。調査費に残が出て、整理事業費に流用。国交省は工期が27年度より約3年延長になると説明。

【平成23年4月21日】 23年度第1回調整会議

ハッ場ダムについては9月に予断なき再検証の結果が出ると聞いている。埋蔵文化財にとっては、どちらの結果になっても、難しい調整が待っている。（県）

【平成23年7月22日】 23年度第4回調整会議

○毎回お願いしていることですが、整理が遅れているのでこのままでは、平成27年度までに報告書を刊行できなくなる。来年度以降、経費をつけてもらい、整理班を増やしてほしい。ハッ場ダム調査事務所では、作業員の退職があるが、時節柄増員はできない。（事業団）

→ダムを造ることになれば、平成27年ダム完成は延びるでしょう（国）

【平成23年9月27日】 23年度第6回調整会議

9月の発掘遺跡がないので、予定を1カ月早めて整理事業に入っている。（県）

【平成23年10月25日】 23年度第7回調整会議

○大柏木（注：原石山へのアクセス道路、東吾妻町）：ダムが再開になるとすぐ必要になるが、今は動けない。（国）

→以前、既設部分の立会調査で陥し穴がみつかった試掘等を実施したい。（県）

＊整理は測量設計費、発掘は工事費。H21 までは整理・発掘ともに測量試験費で実施していたが、測量試験費の残りが少ないため、H22 から発掘は事業費で出すことになった（県）

○再開となった場合、H27 年度完成はないだろう。国交省も人員がいなくなっているため、すぐに本体着工は今の状況では無理。（国）

【平成23年12月21日】 23 年度第 9 回調整会議

事業再開となった場合でも、ダム工事中心と考えられる。埋文については、今年度並みと考えられる。ダムの完成年度は3年程度のびると考えられる。（国）

【平成24年1月24日】 23 年度第 10 回調整会議

○ハッ場ダムの情勢について 予算はついたが、執行できない状態が続いている。2 条件（生活再建案、利根川の河川整備計画）が解決しないと、ゴーサインが出ない。4 月になってもこの状態が変わらない可能性があるが、予算がついているので、いつかは執行せざるをえない。埋文については、25 年度から本格化ということではないか。すでに試掘が済んでおり、未調査の箇所が約 5 万㎡ほどある。（国）

→これまでの経験で 6 割程度が調査範囲になっているので、残り調査面積は 30 万㎡前後が見込まれる。（事業団）→協定の見直しも進めていく必要がある。（県）

【平成24年2月21日】 23 年度第 11 回調整会議

○水没地を当て込んでおくのは、あまりよくない（国）

→どこもできないと、問題が生じる。その場合、水没地も再度検討してほしい。（県）

水没文化財センターの件はどうなっているか、道の駅の計画が変更になり、以前の建設予定地は白紙になったと聞いたが。（県）→1 年以上は進展ないのではないか（国）

→計画そのものがなくなってしまう可能性はあるのか。（県）

→それはないと思う。優先順位の問題か。（国）

6 東宮遺跡の出典に難色を示す国交省（平成 24 年度開示資料より）

【平成24年6月20日】 24 年度第 3 回調整会議

○協議事項 水没地対象となった場合の来年度調査の人的配置は、9～11 月までに（ダム再開が）判明していれば対応は可能。ただし、増班して担当を増やした場合に、冬期の作業を確保できるかが問題。工期は遅れた分は後へスライドする。

→ダムサイトの本体工の工事契約だけで 1 年かかる。3 年で完成は物理的に無理な状況。

○列島展への「東宮遺跡」の出展について

→「ハッ場ダムの遺跡」ではなく、「江戸時代の遺跡」の代表での展示として理解していただきたい。（県・事業団）

→所長に伺っているが、良い返事はない。検討する。（国交省）